

第3回江別市行政審議会 第3部会 会議録（要点筆記）

日 時：平成25年4月15日（月） 18:00～21:00

場 所：江別市民会館 31号室

出席委員：隼田委員、藤本委員、蛭名委員、湯浅委員、高儀委員（計5名）

事務局：鈴木企画政策部長、米倉企画政策部次長、千葉課長（政策調整課）、西田参事（総合計画担当）、村田主査（総合計画担当）、長谷川主任（総合計画担当）

■開会（隼田部会長）

今回の議事ですが、えべつ未来戦略の柱立てについてということで、部会としての意見をまとめて第4回の全体会議に諮ることになっています。みなさんと色々議論させていただいて、第3部会の担当する戦略の柱を明確にしていきたいと思います。

前回の全体会議で色々ご意見が出ていますので、それを踏まえて今日は我々が担当する「次世代に向けた住みよいえべつづくり」という戦略の柱立てを考えていき、そのあとえべつ未来づくりビジョンの内容についても議論したいと考えています。

■議事

（1）えべつ未来戦略の柱立てについて

○ 隼田部会長

今回みなさんにご審議いただくのは総合計画です。どうしても生活に身近な視点から具体のアイデアを出したくなりますが、具体の計画のさらに上の、もっと大きな計画について議論しなければなりませんので、具体案が出てきても構いませんが、それがそのまま具体策として総合計画に記載されるわけではありません。この総合計画を踏まえて、個別の計画が立てられる段階で具体策が出てきます。ただ、総合計画の中で、こういう方向性で、こういう枠組みで具体的な物事を考えてほしいということを議論していかなければなりませんので、仮に具体的な案が出たときには、それが大きな枠組みの中のどこに落とし込めるかということがきちんと情報共有できるようにしたいと思っています。この戦略の大きな柱立ての中で、どこがメインの柱になるのか、もしくは今の状態では表現できていないものがあるのかなどについて、みなさんからご意見をいただきたいと思います。

前回配られた部会の所管事項を見ますと、この第3部会は「子ども」や「教育・文化」というキーワードと、「高齢者」も含めて色々な人たちにとって「暮らしやすい」というキーワード、それから「駅を中心とした賑わい」ということで、なるべく駅中心にコンパクトに街をまとめていきたいという考え方、それと、安心して暮らせるということで防災・防犯・交通安全といった「安心」というキーワードがあり、大きく分けて5つ

の柱があります。その他に、シティプロモート・情報発信ということに関しては、それぞれの部会と重なる部分ですので、この部会でも何か柱として入れるのであれば議論したいと思います。また、「元気な高齢者が活躍するまちづくり」と「4大学が活躍するまちづくり」は、「ともにつくる協働のまちづくり」の戦略と重複する部分として、それぞれの部会で関係してきます。江別くらいの規模の市で4つも大学があるというのは珍しいことですし、これからの少子高齢化社会の中で、元気な高齢者が活躍していかなければ住環境を維持していくことも難しい時代になってくると思いますので、その辺りのことも積極的に絡めてご意見をいただければと考えています。

前回の全体会議で色々なご意見が出ましたが、その後それぞれお考えを整理されていると思いますので、まずは特に気になっている点等についてご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

○ 湯浅委員

確認ですが、具体的な政策の方向、それに伴う施策、具体的な事業などは、それぞれの分野ごとの個別計画の中に盛り込むので、今回の総合計画はあくまでも抽象的になるけれども、あまり抽象的になると意味が無いという側面もありますので、どの程度踏み込むかが非常に難しいと思います。基本的な考え方は前回の審議会でも主に議論があったところに尽きます。そこまでは整理できますが、この後の方向性や施策、具体的な事業のことに踏み込むと、個別計画の範囲に入ってしまう。ですが、これからの社会で絶対に必要で大きな柱になるということは、どこかに浮かび上がらせておかなければならないと思います。そうしないと、個別計画の期間がそれぞれバラバラであるのを見直したり、新たな個別計画をつくる必要があったときに、ここで折角議論したことが反映されないことになってしまいます。あくまでも、そういった具体化に結びつく施策・事業の方向性のようなエキスを総合計画に盛り込むということでしょうか。

○ 隼田部会長

イメージされるのは個別の事業であるとか、具体的なイメージが大半を占めると思います。それを将来、行政の各セクションで個別の事業計画が出てくるように仕向けるような枠組みを示せると良いと思います。どうしても総合計画はぼんやりとしがちなので、同じキーワードが出ていても、読み手の視点や読み方次第では違うものにすり替わってしまう可能性もありますので、そういうことはなるべく避けたいと思います。とは言え、具体的なことを細かく書いていくことは総合計画の趣旨とは違いますので、具体的なことを思い描きながら、そういう方向へ将来進んでいけるようにするには、どういう文言として、柱をどのように用意したら良いか、というところにみなさんのお知恵をいただきながらまとめていきたいと思います。

○ 高儀委員

すぐできること、5年後、10年後にできること、というような区分けをする考え方も持ちながらでしょうか。たとえば、子どもを育てる仕組みや子どもに関することについて言うと、東京の江戸川区では中学生ぐらいまで医療費が無料でした。江戸川区は子

育てに重点を置くところでしたので、子どもに関することにはお金をどんどん投下していました。そのような形で今後江別市も進んでいくのかどうかも併せて議論していけば良いのかなと思います。

○ 隼田部会長

具体的にこうなってほしいというイメージを持ちながら、その上でそういったことを事業化してもらうためには総合計画の柱としてどういう柱を用意しておけば良いかを検討しなければなりません。一括りに住みよいえべつづくりと言っても、ものすごく幅が広いです。子どももいれば高齢者もいますし、何を以て住みよいと言うのか、あまりにも幅が広いので、それを全て網羅的にどれもこれも全部やってほしいとしてしまうと、現実的ではなくなってしまいます。ですので、どこかに重点化したり、優先順位をつけたりすることも必要になってきます。そういう枠組みを示すことによって、行政も個別の事業計画等に優先順位を付けた中で、具体化を考えていけるようになると思います。限られた財源の中で、どういうことであれば実行できて、どういう風にやっていけば今後持続的にまちづくりが行えるのか、という視点で見ていく必要があると思います。次世代に向けて、どのように住みよい街をつくっていくのか、そのためには何が重要視されるべきで、どこに重点を置くべきなのかというところを議論していければと思います。

○ 藤本委員

たとえば、「次世代に向けた住みよいえべつづくり」の中で優先順位をつけるとして、子育ての部分が重要だからまずこれに取り組んで、それから次に高齢者の部分に取り組むというような意味合いでしょうか。

○ 隼田部会長

そういうことも含めて、柱としてどこが一番重要なのかということもある程度示していく必要があります。とても細かいことがたくさんあって入り混じってくるので、そこは江別の現状も意識しながら、それをどうやって変えていけるのかということも意識しながら議論できればと思います。

○ 藤本委員

子どもがだんだん大きくなって行って江別を背負っていく、国を背負っていくことになりますので、やはり子どもを産む20代・30代の若い世代にまず江別に定住してもらう必要があると思います。それによってまず子どもを産んでもらって、その子どもが小学校等に通うようになると、転勤などがある家庭は別ですが、それほど転出していかないと思います。子どもを産んでもらえる世代が住みよいまちにするということを考えると、やはり子育ての部分で手厚い取り組みがあると良いと思います。働く時に子どもを預ける場所があるといったことが第一条件になってくると思います。江別を支えるそういう子どもたちが増えることで、高齢化社会においても負担を担っていけるのではないのでしょうか。若い世代が入って来ないと、地域の柱になるものがどんどんなくなってしまいます。それを一番の柱として、行政に取り組んでもらえれば、そこから様々な広がりが出てきて地域が活性化し、街が明るくなるとか、防犯対策などにつながっていく

と思います。

○ 高儀委員

えべつ未来市民会議でも、まずは江別をどのように良くしようかということ念頭に
おいて議論してきました。ただその中で、江別を札幌のベッドタウンとして考えるとい
う意見はあまりなかったと思います。江別に新しい何かを持ってくることで江別を発展
させるという考え方が主流だったと思います。ただ、現実を考えた時に、江別は札幌の
ベッドタウンです。そういう位置づけを念頭に考えると、大麻にしても野幌にしても江
別にしても、札幌まで10数分で行くことができ、土地も安いし、立地条件が良いで
す。そこでまず、江別をベッドタウンとして売り出すことで、若い人にたくさん定住し
てもらってはどうか。その次に考えなければならないのが、公共交通のネット
ワークをどうしていくかという問題です。その次に、江別は大きく分けると江別・野幌・
大麻の3つの駅がありますので、これらの駅の周辺をどのようにしていったら良いのか
ということを考えていくと方向性が自ずと見えてくるのではないのでしょうか。

○ 蛭名委員

子どもたちは大学進学や就職するときに江別から去ってしまっているのが現状です。
子育て世帯の流入人口を増やすという話を良く聞きますが、現実としては高齢化がどん
どん進んでいる中で、高齢者対策も入っているようですが、「次世代に向けて」という
戦略の題名そのものが、若い人に入って来てもらうために位置付けたという感じを受け
ます。この題名からすると、この中に高齢者対策が入っているようには見えません。「次
代」くらいの表現であれば良いですが、「次世代」だと若い人がメインという感じを受け
ます。

それと、駅を中心としたコンパクトなまちづくりということも書いてありますが、か
つてはどんどん宅地造成して街を拡げていました。そういった駅を中心とした円の外側
に住んでいる人たちは、これからインフラの更新時期を迎えたときにどうなってしまう
のだろうかという不安があります。駅を中心としたコンパクトなまちづくりという話は、
すべての人には当てはまらないのではないかと思います。

○ 隼田部会長

そういった不安も含めて、それをどうやったら軽減できるのかということも含めた「次
世代に向けた住みよいいべつづくり」だと思います。ですから、高齢者をないがしろに
しているわけではないですし、現実問題、北海道は高齢化社会ではなく、もう完全な高
齢社会になってしまっています。これからどんどん人口構成に占める高齢者の割合が増
えていきます。これは、子どもを産み育てる環境づくりを仮に江別市が頑張ったとし
ても、江別市で頑張っただけでどうにかなるレベルではない問題もあると思います。で
すから、高齢者と若い世代が結びつきながら、上手い具合に関わり合いを持ちながらコ
ミュニティをつくっていけるかというところの仕掛けづくりが求められています。その
部分で柱立てを明確にしておかないと、上手くマッチングさせることが難しくなってき
ます。現実問題として駅を中心とした円の外に住んでいる人は、たくさんいます。では、

そういう人たちが今後どうなっていくのだろうか、どうしたら良いのだろうかという議論はえべつ未来市民会議でもたくさんありました。

○ 湯浅委員

一番目の柱のタイトルは「子どもを産み育てる環境づくり」となっていて、その中の5つの項目はすべて産まれた後の子育てについてのことになっています。江別だけでなく北海道の状況を見ても少子化が進んでいますので、「子どもを産み育てる環境づくり」という柱であれば、「産み育てる」の「産み」の方の項目立ての一つとして「産みやすい環境」というものを大前提として入れておくべきではないでしょうか。少子化の問題以前に、男女ともに晩婚化の大きな流れがあります。同時に結婚した後に子どもを出産することについて、様々な将来への不安などが重なっているだろうと思いますが、少子化の原因を浮き彫りにして、それを少しでも改善して出生率を上げるための対策を項目立ての一つにしたら良いのではないのでしょうか。その対策の中で一番大事なものは、出産から子育てまでの中に男女共同参画をどう色濃く打ち出せるかです。雇用の場における事業主側の意識改革や産休後の再就職など、具体的に江別市としてそういう部分に力を入れて、産みやすい環境を整備するということを、江別への定住や企業誘致と併せて、しっかり位置付けすべきではないでしょうか。こういう対策を市民が計画の中で見ると、将来結婚して出産することに躊躇していた人たちの意識変革に役立つのではないかと思います。

○ 隼田部会長

産みやすいという部分についても、市の姿勢をきちんと見せるべきだというご意見かと思えます。

○ 湯浅委員

江別は新千歳空港から小一時間で行くことができるし、札幌にも近く、都市と農村環境・自然環境の調和がとれた街で、降雪量が多いが安全な街であるといった要因の他に、産みやすい街という部分も大前提として一項目入れることで、計画を見た市民や企業の意識改革を促すべきですが、今回の全体の戦略の柱立ての中ではその部分はちょっと弱いと思います。そういった柱をこれから追加して、そのための戦略を考えると良いと思います。特に企業の意識、男性の育児休業といったことや、それに対する職場の理解、男性の意識改革などが重要で、様々な審議会等に女性が参画することも男女共同参画の一つではありますが、根本的にはすべて家庭から始まるというこの世の慣わしからすると、そのような柱が必要だと思えます。

○ 蛸名委員

複数の子どもを産むことが、色々な条件の中で難しくなっています。女性が社会参加する中で、子育てと家事・仕事の両立が難しいので、それを応援する体制が必要です。一人の女性が一人産むのでは人口がマイナスになっていくのが現状ですから、二人以上の子どもを産んでもらえるように意識を高められるようにしたら良いのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

それは江別だけではなく国でも考えていかなければなりませんし、我々個人も考えていかなければならないことだと思います。江別市でそのことを実現しようとしたときに、具体的話になってしまいますが、どんなことをすれば産みやすい環境や子育てしやすい環境がつかれるのでしょうか。現在の江別市は、今ちょうど60歳代ぐらいの方が子育て世代として入って来られて、子育てが一段落して子どもが巣立ってしまって、昔の子育て世帯が高齢者として残されているのが現状です。都市部のマンションでは代替わりがあります。ライフサイクルが変化して家族が独立していったときに、広すぎるから引っ越そうとか、逆に中古のマンションを安いから若い世代が買うといったように、代替わりの循環が上手くいってれば問題ありませんが、その循環が上手くいなくなっています。後に続く人口が少ないという問題もありますし、それだけではなくてどうも上手くいかない状況です。そういったときに、産みやすい環境をつかって、江別は子どもを産みやすく育てやすいということ打ち出して、具体的な施策ができてくると、人が入ってくるかもしれません。そうすると何十年か前の世代の人たちが入ってきた時と同じような状況が生まれて、世代交代をしながら上手く維持できるかもしれません。そのためには、ただ「産みやすい」というだけでは駄目だと思います。街がどんなイメージで、どんな恩恵があると産みやすい状況になるのでしょうか。湯浅委員が企業の意識改革ということをおっしゃいましたが、これから経済状況が上向くのかどうか良く分からない状態では、簡単にできることではなくて意外と難しいことかもしれません。

○ 蛭名委員

男性の育児休業について、市役所が率先して取り組むと良いのではないかと思います。制度があったとしても男性の立場としては、長期間職場から離れるのは現実的には難しいと思います。今の女性は社会参加をしており、自分も仕事を続けながら子育てするとなると、やはりパートナーの協力が無ければ難しいと思いますが、企業の意識改革が難しいとなるとどうすれば良いのでしょうか。

○ 隼田部会長

現実問題、今の日本の状況では、つい後ろ向きに考えてしまうのは仕方ないことですが、そこから目を背けてはいけないと思います。だからと言って、後ろ向きに考えなくても済むような状況をすぐにつくれるのかということ、総合計画で謳ったとしても、それが実行力のあるものとして10年の間で進んで行くかどうかは分かりません。国によっては男性でも育児休暇をたくさん取得しているところもありますが、それは国を挙げてそのような方針で取り組んでいるからできることです。そうではなくて、男性が育児休暇を取り難い状況で、男性のサポートなしに、女性が働きながら子育てをすることは極めて難しいと思います。それを難しくないようにする方策はないのでしょうか。少しでも負担を軽減できて、もう少し社会参加がしやすくなる方策が、今の江別市の中にあるのでしょうか。そういうところが何か考えられると、戦略の柱につながっていくのではないのでしょうか。

○ 蛭名委員

子育てをした経験のある人と子育て世代との交流が少ないと思います。核家族化というか、子育て世帯と親世帯が同居しているケースが少なくなっていますので、ちょっとした子育てのアドバイスがもらえるような仕組みがあると良いと思います。仕事をしていなければ、男性の協力がなくても子育てに専念できますが、子どもと向き合っているばかりだと煮詰まってしまうので、はけ口になる場所が必要だと思います。イオンタウンに子育て世代の母親たちが集まれる場所を整備する話があるということですので、そういった取り組みがあると助かるだろうと思います。

○ 隼田部会長

子どもを育てている母親たちが相当煮詰まるであろうことは、自分の経験から言っても間違いないと思います。それを上手く寄り添いながら、助け合いながらというコミュニティがあるかということ、必ずしもあるわけではないのが現状です。一方で、若い子育て世代に定住してもらって、子どもを増やすことで人口ピラミッドの歪さを少しでも直したいという気持ちがあっても、実は結婚していない30代・40代の女性が大勢います。晩婚化している原因を探ると、その人たちは仕事が面白くて、今結婚したり、子どもを持ったりすると、それができなくなってしまうのではないかとことから結婚できずにいて、気付いたら相手がいなかったという状況で、一生懸命婚活しているけれど相手が見つからないという状況になっています。それを考えると、結婚して子どもを持って安心して仕事ができるという空気がないので、その空気をどうやったら作り出せるのかということを考えてみると、子育て環境のことだけ考えていても解決策は出てきません。戦略にある5本の柱立てのそれぞれがまったくリンクしていないように見えますが、それらを上手くリンクさせてあげることで、その辺りの手立てや柱立てが見えてくるのではないかと思います、いかがでしょうか。

○ 高儀委員

リンクしていると思います。なぜかと言うと、まず動きやすいということ、色々な意味でフットワークが良いことが大事で、フットワークを良くするためには、交通ネットワークの充実です。フットワークを良くすることによって子育てで煮詰まった状況を解消できる部分も出てきます。どうやって煮詰まった状況を解消するかということ、色々な情報を入手できるようにすると良いと思います。大学が近くにありますので、大学を活用することによって、教育や文化のことも子育ての中に含めることができるので、リンクすることはすぐにできると思います。ただ、難しいのは男性も晩婚化していることです。男性も女性も晩婚ですので、40代の女性だとせいぜい子どもが1人だけということがあり、悪循環になっています。

○ 湯浅委員

安心して子どもを出産できるというような一項目を入れて、具体的な対策は色々な要因分析をした上で、それにフィットした方向性を打ち出していくことになりませんが、例えば、江別市の場合は、乳幼児保育や障がい児保育などは、他市と比較しても遜色ない

ほど色々な取り組みがされていると思います。先ほど札幌との関係の話が出ましたが、大麻の保育所に子どもを預けて札幌へ通勤している母親がいます。そういう現状から思い浮かんだことがあります。規模の大きい福祉施設や医療機関では、施設内に保育所を整備しています。自分の勤め先に子どもを預けた方が、時間的なロスがなくて安心感がありますので、そのような保育所が勤め先にあるのが理想です。個別の企業なり事業所では難しいので、たとえば工業団地内に工業団地協同組合か商工会議所で、共同で保育所を整備できないでしょうか。他の部会の戦略に関わることですが、第2部会の担当する戦略の「企業の人材育成の支援」というところで、そういった子どもを安心して育てやすい環境づくりに、企業や事業所が取り組めるよう支援するというようなことを盛り込んではどうでしょうか。これからは経験豊かな高齢者の雇用のこともありますし、障がいのある方々の雇用といったことも高等養護学校の誘致と併せて進めて、障がいがあっても一人ひとりの適性に合わせた仕事に就けるように江別市として進めていかなければなりません。女性の労働力も積極的に活かせる場所をつくる必要があります。生産年齢人口が大きく減少していくことへの対策という観点で考えると、産業の戦略で人材育成のことや、協働の戦略で元気な高齢者が資格や経験を行かして働ける場づくりなどと謳っているのに、これから30年・50年先の大事な人材である子育て真っ最中の世代に対する取り組みのことを色濃く出さないわけにはいかないと思います。あらゆる市民が対策としてそれぞれの役割を担っていくべきで、欲を言えば、障がい者と高齢者の住まいのことも同じ観点で相対的に漏れなく捉えていく必要があります。あまり個別計画や各部会でそれぞれの分野ごとに力を入れると、その辺りのつながりが希薄になり、計画ができた段階で色々と欠落している部分が出てきてしまい、市民に訴える力が弱くなるのではないかと思います。

○ 隼田部会長

それは第2部会の産業の戦略に入ることなのではないでしょうか。高齢者も女性も障がいのある方も、経験を活かして雇用されるべきだという話になると、住みよいいべつづくりの話から逸れていってしまいます。ですが、これらの方々と住みよい環境をつくっていくという視点で捉えると、第3部会の住みよいいべつづくりの話になります。その中で、たとえば、企業が雇用するといったような場合は産業の戦略と関連しますし、雇用するのではなくてボランティアで活躍できる場ということでは、元気な高齢者が活躍するまちづくりの部分で、この部会の戦略の住みよいいべつづくりと協働の戦略の両方でオーバーラップする部分です。その部分で我々が議論すると、この部会の範囲内で収めることができます。

○ 湯浅委員

江別の企業がこういう取り組みをしているということが、市外へも伝わって、江別に住んで子育てしながら、江別で勤めるというような波が起こるのではないかと思います。

○ 藤本委員

家庭内の環境も重要になってくるのではないのでしょうか。子育て世代におじいさん、

おばあさんが関わることによって生きがいを感じて、自分も健康でいなければならないと気も張るでしょうし、子育てしている母親が家を空ける時でも、おばあさん、おじいさんに預けられる環境があれば一番安心できます。魅力的な学校や文化・芸術に触れようと思っても、子育てで手一杯になると行きづらいのではないのでしょうか。全体的に生活の主体が満たされてからでないと、文化・芸術といった部分は重要になってこないと思います。それぞれの生活環境の中で解決しやすいような、たとえば税制面で優遇するなどして、3世代が同居するようになれば、高齢者が怪我しないような環境になったり、医療の面で予防効果が期待できたり、全体的に活性化が図れると思いますので、それぞれの目が届く環境であると良いと思います。3世代が共存できると良いのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

今のご意見には重要な要素が含まれていると思います。核家族化したものを、もう一度、大家族まではいかなくても、3世代ぐらいで同居または近隣に住むことができたなら良いというご意見でした。ですが、現実問題として、それができる人とできない人がいます。たとえば、江別にお年寄が住んでいて、子どもが仕事で市外に出て行ってしまった場合、江別市内に新しい雇用があったからといって、今の仕事をやめて江別に戻ってくるかという、必ずしもそうではありません。一方で、若い世代が江別に住んでいて、江別は良いところだから一緒に住もうと親を呼び寄せるという場合に、親は喜んで来るのかという問題があります。喜んで来る親もいるかもしれませんが、自分が住んでいるところのコミュニティを捨てて新たな場所に移ることに抵抗される方も多いと思います。高齢者のコミュニティの研究もしていますが、自分が住み慣れた場所でそのまま老いることが世界的に理想とされています。福祉施設に入らなければならないような体の状況になっても、できればそのまま在宅でいたいし、それが無理であれば近くの施設に入りたい。それが叶わなくて遠くへ行ってしまっ、不幸な思いをしている方がいます。そういう状況の中で、上手く親を呼び寄せられるのかということを考えなければなりません。そうした時に、呼び寄せられない人、3世代で上手く助け合いをすることができない人たちは、取り残されてしまうのでしょうか。取り残されない新しい形もあるような気がします。理想的には家族同士の助け合いですが、家族が無理だったときにどのような仕組みが考えられるのでしょうか。

○ 蛭名委員

地域で助け合うなどでしょうか。ボランティアでもそういう類のものがあると思います。

○ 隼田部会長

江別市内にそのような事例があるかは分かりませんが、そういう活動をしている事例は色々あります。たとえば、賃貸マンションで多世代が共生するものがあります。食堂があって、みんなで食べられるし、自分の部屋で一人でも食べられる。お年寄りたちは一人で食べたくないの、食堂に出てきます。夫婦共働きで子どもが鍵っ子の場合は、

そこのおじいさん・おばあさんがたくさんいる中で、地域というかマンションの中で育てられていきます。赤の他人同士ですが、実のおじいさん・おばあさんと孫のような関係で上手くいっている例もあります。

○ 湯浅委員

都市部を中心にシェアハウスという方式が増えてきています。マンションや少し規模の大きい空き家を一部改造して、食事などをする共用部分と個室があるというものが増えています。認知症高齢者の方々のグループホームや障がいのある方々のグループホームなりケアハウスといったものと同じように、できるだけ家庭的な雰囲気のものが増えつつあります。空き家情報の発信などがえべつ未来市民会議の提言にありましたが、昭和の前半までに生まれた高齢の世代の人たちは、地域のコミュニティを大事にしてそこに永住したいと思っている方が多いです。シェアハウスというのは一つの方法ですが、逆に、非常に住みやすく、暖房も効いていて雪かきもしなくて良いというように、至れり尽くせりになってしまって、精神的に物足りなさが出てくることによる弊害が心配されます。行政として、その方が効率的だからということで空き家などを利用して共同で住んでもらおうというアプローチが強くなればなるほど、色々な反省材料が出ると思います。あくまでも、一人の人間として最後までどのような生活がしたいのかという、個人の意思を尊重することが根底にあるべきだと思います。

○ 隼田部会長

シェアハウスは、震災後、若い世代を中心に人と触れ合いながら住むことを単身者が求めるようになってきたという背景があって増えてきています。ただ、シェアハウスとまでは言わなくても、地域の中でのつながりを上手く持てれば良いと思います。大麻地区では、元気な高齢者が便利な場所へ出て行ってしまうというケースがあります。札幌市でも、中央区で人口が増えて周辺部で減っているという現象がありますが、これはなぜなのでしょう。そのような、遠いところではなくて、比較的近いところでの住み替えについてはハードルが高くない人もいます。一方で、どうしても今住んでいるところから離れたくない人も相当数いますので、その辺りのバランスを考えながら、協働のまちづくりのところになります。我々の部会では住みよいという視点からどうやって人間関係をつくっていけるのか、というところを盛り込んでいけると、子育ての話にもつながりますし、コンパクトなまちということや交通の話にもつながると思います。

○ 高儀委員

マンションの1階が保育所になっていて、その上の階に高齢者が住んでいて、保育所に自由に遊びに行くことができるという事例があります。行政としてそういうことをやっていくようになれば、次世代に向けたまちづくりになるのではないのでしょうか。先ほど企業の共同保育所の話が出ていましたが、これは一つの手だと思います。それを行政が主導していくような形になれば良い方向に進んでいくのではないのでしょうか。

○ 湯浅委員

新栄団地の建て替えで、共用部分に交流のスペースを設けて、たとえば放課後児童の

支援の役割や地域で一人暮らしをしている方々が集まるというような機能を兼ね備えたものを入れられないでしょうか。個別に対象別に様々な施設をつくるよりも、こういった再開発にあわせて複合的な機能を持った施設をつくるべきだと思いますが、今回の建て替えの計画の中に入っているのでしょうか。

○ 事務局

どのような機能を持たせるかは別として、何らかの形で地域との交流ができる場を設けるという方向性で、2棟目と3棟目の間に交流スペースを設ける予定です。

○ 湯浅委員

これからのまちづくりでは、そういったものを利用して放課後児童対策等で世代を超えた見守りができると、地域に住んでいる人の交流にもなり、子どもたちにとってもお年寄から色々なことを学べて良いのではないのでしょうか。65歳以上の人口が5割、6割に達しているという問題が全道・全国あちこちで出てきていますが、20年ほど前に、深川市が一已（いちやん）など幌加内に近いところの集落に住んでいる方の生活のために、市街地に近いところに団地をつくって、昔から農業をやっていた所に通って作業をするという取り組みをやりました。その取り組みで、5年・10年経ってからどういう効果とどういう問題点が出たかを検証すると良いと思います。十勝の音更町では、平成元年頃に町営住宅を建てるときに、2階部分は大谷短大の学生が入居して、1階に高齢者が住むという事例がありました。風連町では、特養の敷地に道路1本挟んだところに町営住宅をつくって、2階が高齢者以外の住宅となっており、1階の高齢者の部屋に緊急通報の装置が付いていて、何かあると24時間体制の特養につながって、場合によっては消防にもつながる仕組みでした。陸別町も同様の事例がありました。そのように、まちづくりの一環の中でそのようなシステムが組み立てられていくのが理想です。ですが、江別のようにまちづくりが色々な形でできあがっているという制約の中で、どのような仕組みをつくれれば、高齢者も障がい者も安心して住めて、同時に子どもを安心して産めることにつながっていくのか、過去に他市町村で取り組んだ事例を検討に活用したら良いと思います。空き家などの情報発信による住み替えの促進をしていくときに、そのデメリット部分をどう江別らしく解消していくかの参考になるとと思います。

○ 隼田部会長

湯浅委員から情報提供いただいたように、色々な取り組みがあります。特養やグループホームの設計を道内で何棟かやったことがあります。その時に施設側と相談してやってきた事例として、コミュニティにも開放するような交流空間をつくることがあります。ただ単に交流するだけの空間ではなくて、コミュニティ・カフェやコミュニティ・レストランのような機能を取り込んで、お年寄りが月に1～2回そこにボランティアで来て働いて、他の時にはお客として来るという形で、コミュニティを維持するための仕掛けに取り組んでいるところがたくさんあります。そういったことを、福祉施設などの個別の話ではなくて、総合計画の中で上手く謳ってあげて、こんな取り組みがこの部分の具体例として考えることができイメージできるような文言を入れることができる

と良いと思います。

○ 蛭名委員

世代間交流の場を設けるといようなことですね。

○ 隼田部会長

集まれる場所をきちんと設けられることが重要で、それが世代間交流につながるのかもしれない。

○ 蛭名委員

個別に、たとえば子育て世代だけが集まるのではなくて、世代間で今起きている問題を共有できるようになれば良いと思います。時代が変わっても育てることには変わらないですから、経験したことをアドバイスしてあげられる場所があると良いと思います。

○ 隼田部会長

アドバイスもいただけるでしょうし、手助けもしていただけるかもしれません。そうすると、先ほどご意見があった同居世帯を増やそうということの疑似的な仕組みがコミュニティの中でできるかもしれません。

○ 蛭名委員

本当の家族が同居できれば良いですが、皆がそうできるわけではありませんので、擬似的であっても地域ごとにそういった仕組みがあると良いと思います。

○ 高儀委員

集まれる場所がある程度市内に散らばってあれば良いと思います。たとえば野幌の情報図書館はお年寄から子どもまでたくさん来ていますが、野幌だけでなく大麻にも欲しいし、江別にも欲しいということになります。

○ 蛭名委員

図書館では交流はしていないのではないのでしょうか。

○ 高儀委員

雰囲気としてはありますが、話しかけたりというところまではいっていません。

○ 蛭名委員

何かプログラムを設けて交流するということがあると良いと思います。

○ 隼田部会長

積極的な関わりを持つためには、裏方の人が場をきちんと設定してあげて、話しかけるきっかけをつくったりという、きっかけとなるプログラムが必要です。

○ 蛭名委員

知らない者同士が話しかけるのは大変ですので、ちゃんとしたプログラムが必要だと思います。

○ 高儀委員

図書館なので、あまり大きな声で話すことはできませんので、集まる場所としては図書館ではない方が良くもありません。

○ 藤本委員

集まる場所や条件も大事ですが、無関心層が多いと思います。そういうことをやっていることも知らないし、それに関わることでどうなるかも知らないでしょうから、そういった各世代の無関心層の意識を喚起しないと、場を提供したとしても参加してこないと思いますので、参加してもらえようにする仕組みが重要ではないかと思います。

○ 隼田部会長

無関心層は必ずいます。では、無関心層が関心を持たざるを得なくなる状況とはどういう状況でしょうか。マンションの例で考えてみましょう。ワンフロア2軒で、エレベーターホールがあって、玄関が向い合せになっているようなものを想像してください。エレベーターに乗って自分の階に着いたら、すぐに玄関があって部屋に入ってしまうような状況ですから、人間関係がほとんどできず、挨拶すらないところもあります。場所によっては、立ち話があったり、人間関係ができて、一緒に温泉に行ったり、ゴルフへ行ったりするところもあります。サークル活動的なことをやっているマンションもありますが、何が違うのでしょうか。お互いの名前と顔が分かるようになっていくためには、どのような工夫があったら良いと思いますか。先ほど湯浅委員から、団地で集まれる場所があったら良いというご意見がありました。阪神淡路大震災後、大阪の公営住宅でエレベーターをつける改修工事がありました。その団地は高齢者ばかりで、コミュニティが大事だということで、集会所のようなものをエレベーターホールの近くに設けました。ある所では、エレベーターホールに行くと、必ず声をかけられるような距離感で、壁がないところにホールがあって椅子やキッチンがあり、通りかかった時にお茶でも飲んでいかないかと声をかけられるような雰囲気になっています。ところが、壁があってドアがあって、その中に集会所があるという構造だと、集会所にいる人はホールを歩いている人に気づかないし、逆にホールを歩いている人も集会所で何が起きているか分からないため、無関心な人はそのまま無関心なままになってしまいます。見るとか声がかかけられるという空間の状況だと、無関心層が無関心層ではなくなったという事例です。集まる場所の設置の仕方というのは非常に重要で、これは決して箱物の話ではなくて、関わり方の問題です。先ほど蛭名委員がおっしゃったプログラムのことでも、ちょっと興味を持って気軽に参加できる、しかも積極的参加ではなくて、受動的で距離を置きながら参加していたのが、いつの間にか巻き込まれてしまって積極的に参加するようになるというような仕掛けづくりができると、高齢者の生きがいづくりにもなり、経験豊かなお年寄りの経験を上手く活用して地域に役立てることに也成了り、そこに行くとな楽しいということになります。その場に子どもを預けると助かると思うようになると、若い世代も来るようになります。コミュニティ・レストランみたいなところだと、普通のレストランでは子どもが騒いで気が引けるので連れていけなくて、結局家に籠っているという人たちも気軽に行けて、子どももわいわい楽しんで、お年寄りから遊びを教わって、遊ばせている間にママさん同士で情報交換をしているという場面に遭遇します。そういう話になると、この戦略の5つの柱のうち、1番目と3番目の柱が繋がってきますし、その間の仕掛けのプログラムの部分に教育や文化のことが繋がってくるかもし

れません。ですが、それをこの江別でしやすくするために重要なことは何でしょうか。江別には3つの核があります。それぞれの核を中心としたエリアから外れている地域もあり、さらにその外側に農地もあつたりします。先ほど高儀委員から、交通ネットワークさえあれば、その辺りのことが解消するのではないかとのご意見がありました。その交通ネットワークをこの人口規模でものすごく充実させると、破たんすると思います。ですから、上手く充実させながら、上手い具合に人の入れ替えなどをやっていかないと、この次世代に向けた、どんどん進行する高齢社会に向けたまちづくりというのは難しいと思います。

○ 湯浅委員

今、多くの自治会ではなかなか役員の担い手がいないという問題もあります。また、江別での事例はまだありませんが、高齢者が孤独になって不幸な事件が起きています。そのような観点から、自治会としても独り暮らしの方を誘って、愛のふれあい交流事業をやっています。それから、災害発生時に支援を要する人のリストをつくったりしていますが、色々と組織的に行なっても、色々なプログラムを用意して声をかけても、気持ちが塞ぎがちになっている人が足を運ぶようになるのはなかなか難しいです。プログラムの内容はあまり難しくなく、その場所に行くとなんとなくほっとするようなソフトな雰囲気や、やわらかい発想とプログラムがあると良いと思います。自治会館などが遠ければ、今あちこちに出てきている空き室・空き家を持ち主と交渉して、歩いて行ける範囲を第一に場を設けると良いと思います。それからどのように声かけをしていくかという問題があります。せっかく立派な施策なりプログラムをつくっても、なかなか足を運んでもらえないという問題をどうするかです。江別という比較的戸建住宅が多い街ですと、交通の問題もあります。大きな会場で何かの催し物をやる場合に、交通体系をどうするかが問題になりますので、歩いて行ける範囲が大事です。篠津地区では、高齢者が集会をするときに、4kmぐらいある自治会館までの道のりで、近所の人同士で車の乗り合いを行なっています。それもやはり人と人とのつながりで、マンションの中で何十人も住んでいて、人との距離が近くても人間関係が希薄である場合をどうしたら良いでしょうか。また、個人情報保護法の問題があって、民生委員の方々も現実的に問題にぶつかっています。日頃からの人間関係をどう構築していくかが重要で、長い人生で急に高齢者になったから新しい仕組みをつくるというのは、簡単にはいかないと思います。交通ネットワークを今検討しているそうですが、3つの駅を中心に8の字方式の交通網が良いと思います。それも口で言うのは簡単ですが、なかなか現実的に解決するのは難しいので、歩いて行ける範囲を第一に考えて、先ほど述べた新栄団地のケースが一つのモデルになれば良いと思います。朝から晩まで人が集まれて、学校帰りの子どもたちが寄って行けるような場所として、一つのモデルになれば良いと思います。

○ 隼田部会長

そのようにするためには何が必要でしょうか。

○ 高儀委員

何があるか分からないから無関心なのだと思います。分かれば関心を持つようになるので、見える化するようなシステムづくりをすれば、無関心層も減ってくるのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

見える化するにはどうしたら良いのでしょうか。

○ 高儀委員

何をやっているかを知ってもらえるように、情報を発信することではないのでしょうか。情報が少ないので、もっと情報が見えるようになれば良いと思います。それにはPRも必要だと思います。

○ 藤本委員

情報はいっぱいあると思いますので、情報を目にするまでの意識が必要だと思います。

○ 隼田部会長

情報というのは、取りに行かないと素通りしてしまいます。たとえば広報誌や回覧板など、ハンコだけ押して何も見ないで回してしまえば、情報は素通りしてしまいます。無関心層というのは、そういうところに関心が無いので、ほとんど素通りに近い状況だと思います。適切な情報を適切な方法で提供しなければなりません。結局は意識の問題だということになるとそこで詰まってしまう。その意識の問題を乗り越えられるようにするにはどうしたら良いのでしょうか。

○ 藤本委員

単純に、人と人とのつながりしかないと思います。

○ 隼田部会長

人と人とのつながりはどうやったら生まれるのでしょうか。人とのつながりがこれだけ希薄になっている状況ですが、それを紡ぎ直す試みが必要で、そういう試みを支援するような計画があるとやりやすくなると思います。

○ 高儀委員

家の庭先でおじいさんたちが碁や将棋をしていて、そこに子どもたちが寄って行って、おじいさんたちから色々なことを教わったというのが昔のコミュニケーションでしたが、今それができない状態になっていますので、それに代わるものが何かないのでしょうか。

○ 隼田部会長

先ほど私が述べた事例には何か特徴がなかったのでしょうか。無関心層でも無関心でいられなくなるようなことがあると思います。生活の中で欠くことのできないものに関しては、無関心ではいられません。しかし、直接関わらなくても済むことであれば、無関心でいられます。では、生活の中で欠くことのできないものとは何でしょうか。衣食住のうち、着るものはそれぞれが買い物に行けば済みますし、住居もそれぞれのプライバシーが守られていなければなりませんので閉じた空間になりますが、食というのは、どこから買ってきて食べたり、自分でつくったりと色々ありますが、大勢で食べたり、知り合いと食べたりすると楽しいと思います。その部分を上手く使って、コミュニケー

ションをつくって、人間関係を強くしていこうとしたのがコミュニティ・カフェの事例です。安く食べられて、長居できれば、お客さんが来ます。長居している時に、ソフト面での仕掛けで、相席にさせられてママさんのような人が上手く話をつないであげるということをやると、何度か顔を合わせるうちにだんだん友だちになっていって、そのまま集団で旅行に行くようになるというケースがあったりします。白老町のグランマという地域食堂の例もあります。そこはシャッター通りになっていた地域の商店街をなんとかできないかということで、地元のおばあさんたちが町のお金で葉っぱビジネスの視察に行きました。そして自分たちで何ができるかを考え、山菜が取れるので地元にある山菜を使って料理を出したり、野草茶をつくったりして、コミュニティ・レストランをやっています。常連のお客さんもいるし、色々なところからお客さんが来ます。そういうものをサポートする仕組みが必要だと思います。基本的にはほとんどボランティアで、誰かが積極的に動かないと始まりません。釧路市で子育て世代のお母さん方が集まる地域食堂の事例がありますが、その仕掛け人は実は行政マンで、行政の仕事としてやっているのではなく、時間外にNPO法人としてまちづくりの仕掛けをどんどんやっています。そのようなキーパーソンがいないと続かないのが現状です。台湾のある団地の事例が話題になっていて、台湾中から視察が来るほどですが、そこでは地域の自治会のようなもののトップが選挙で選ばれて、さらに国から給料が出ます。つまり市議会議員のような人が、各コミュニティに一人ずつ配置されていて、その人がコーディネーターをやっています。コーディネーターがコミュニティの中で上手く元気なお年寄りを集めて、老人大学や劇団をつくるなどの色々な仕掛けをつくっています。劇団員は地域の老人たちで生きがいづくりにもなり、お年寄りの健康管理をするために住民同士で血圧をはかったり、町内会館のようなところで地域食堂もやっています。このような仕組みだと、選挙で選ばれた人には給料が発生していますが、それ以外の100人くらいの町内の人たちはみんなボランティアです。今回の計画の中でそういうような仕掛けがくれるようなものが何かできないものかと思います。江別の場合は戸建が多く、距離が広がってしまっていて、実際の今の江別の住民の状況と合わなくなってきています。それをできるだけ触れ合いをしやすいような距離感にするために、江別市内で上手い具合に住み替えを促進して、利便性が高く、しかも昔から知っている人が比較的近くに住んでいるという状況にしてあげると、人間関係が近くなって、冬場の雪の問題もあまり関係なく、一年中他の人と触れ合いやすくなります。そういう仕掛けづくりを促進できるような枠組みを提案しなければならないと思います。

○ 湯浅委員

コンビニがこれだけ増えていますので、これから近い将来、物を販売するスペースに5人～10人ぐらいが集えるカウンターのようなものができて、買ったものをそこで食べられるというように、集まれる場としての役割の変化が民間レベルではあるのではないのでしょうか。そういったことも視野に入れて、独りで暮らしている高齢者や若い人が出会う場として活用できるのではないかということと、独り暮らしの出不精な方が街へ

飛び出せるような運動や呼びかけを行うこと、コアになるような場を江別市内に一か所でもつくっていただけるようなキーマンになる人が出てくる必要がありますので、そのようなことを計画の中でスタートさせたいと思います。

○ 隼田部会長

どうしたらそれが可能でしょうか。

○ 蛭名委員

地域の身近な場所といえば、公民館とかではなく、自治会館だと思います。自治会館がないところは、地区センターが良いのではないのでしょうか。地区センターの方が行政との関連も強いので、地区センターを利用する地域の自治会の人たちと一緒に新しいことを試すのに良いと思います。

○ 隼田部会長

新しいことを試すのにはどうしたら良いのでしょうか。先ほど述べたように、重要なのはキーマンです。キーマンがいないと上手くいかず、失敗した例も山ほどあり、昔から良く言う箱物行政と同じようなことの繰り返しになります。キーマンをどうやって作り出せる可能性があるかというところを、今回の総合計画で具体的な施策につながるように表現しなければならないと考えています。

○ 藤本委員

そうすると継続的に活動することになると思いますので、たとえば学生が主体となるというのはどうでしょうか。授業の一環のような形で大学側と連携して、そういった活動をした場合に単位取得など学生に有利になるような仕掛けがあれば、大学で学んだことが社会へ出たときに反映されていったり、その人が卒業した後もまた新たに関わってくる人間が増えることで、無関心層が徐々に変わっていく足掛かりにもなるのではないのでしょうか。これからを担う人間がその役割を背負わなければならないと思いますので、今の50代、60代の人たちの力を借りながら、学生が授業の一環としてできるシステムがあれば良いのではないかと思います。

○ 隼田部会長

せっかく大学がありますので、連携できれば良いと思います。ただ、自分が大学の教育現場で強く感じるのは、そういうことをできる学生が極めて少ないのが現状です。キーマンの下でインターンシップ的に働くのであれば、単位化するなどして、継続的に学生に活動させることは十分可能だと思いますが、学生に毎回キーマンになってもらうというのはおそらく難しいと思います。元気な高齢者や大学生が集まる場所があって、その場所を上手く切り盛りしていくキーマンが必要です。

○ 高儀委員

キーマンを育てるのはかなり難しく、また高齢者をキーマンにするといっても見極め方が難しいので、その辺りのことを今回の総合計画で謳えるのでしょうか。

○ 隼田部会長

具体的にキーマンをどう育てるかは、個別の事業計画になります。例えば、札幌の老

人クラブ連合会では、地域のコミュニティのキーマンになるお年寄りを育てるような講習会が行われています。そういう形のものをもっとシステムチックにやっていくということはあるだと思いますが、ただ、教育を受けてもその人たちがキーマンとして働いてくれるかどうかは分かりませんので、キーマンとして働いてもらえるような状況をつくることも必要です。

○ 高儀委員

江別にも老人大学がありますので、その人たちを使うということもありますし、大麻に子育てのお母さんの団体でマダムの会というものがあります。その中の人たちに話しかけて何かに取り組むこともありかと思いますが、それがすぐにキーマンとして連携できるかどうかは分かりません。

○ 隼田部会長

すぐには難しいかもしれませんが、すぐにできる人もいるかもしれません。要するに、みんなが住みやすく、子どもも産み育てやすく、お年寄りも元気に活躍できて、生きがいを持って、安全で、ということはどうやって実現していくかという方向性を示すことが今回の総合計画では重要です。その方向性を示すことで、具体的な施策としてそういう人を育成するような事業をしようとか、その人たちを育成した後に、その人たちが活躍できる場をつくりましょうとか、もう既に色々活動している人たちに委託しましょう、というように色々個別事業が考えられると思います。

○ 藤本委員

質問になりますが、学生の中にはそのようなキーマンとして動ける人はあまりいないのでしょうか。

○ 隼田部会長

今の大学生は一昔前の大学生とかなり氣質が違います。今の高齢者と言われる60代・70代の人たちがものすごく若々しいことからわかるように、今の大学生は一昔前の高校生や中学生のような感じで、歳を重ねても若い部分がありますので、コンスタントにキーマンになるような学生が出てきて活躍するというのは難しいと思います。4年のサイクルで人が入れ替わってしまいますし、単位化するととなると1年ごとに替わってしまいます。サポートする人材にはなっても、柱になる人材となると難しいと思います。もしかしたらその中から柱にそのまま化ける人が出てくる可能性はありますが、それが多いたとは思えません。

○ 蛸名委員

そういった活動に関わっているうちに、江別で仕事を探して定住してくれるようになれば良いと思います。

○ 藤本委員

学生は地方から来ている人も多いと思いますので、たまたま大学が江別にあって、大学に通う中で江別のことに取り組むことで江別に愛着を持つようになって、定住してもらえたり、江別のことが広まれば良いと思います。4年間で人が入れ替わるサイクルの

中で、上手く引継ができるシステムがあって、50代・60代・70代の知恵もあって時間にも余裕のある人が頭脳となって、実質動くのは学生であったりというような仕組みが何年かのうちに確立できれば、地方から来ている学生を取り込むことができ良いのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

その可能性はあると思います。

○ 蛭名委員

大麻の銀座商店街で学生も一緒になって活動するような取り組みをやっていませんでしたか。

○ 事務局

緊急雇用対策の事業で実施し、24年度で終了しています。

○ 高儀委員

「・魅力的な学校づくり」は書いてありますが、学生の環境づくりのことがありません。たとえば大麻や文京台の学生が多い地区を、早稲田の学生街のようにできないでしょうか。

○ 隼田部会長

学生や大学の規模の問題があります。

○ 蛭名委員

総合計画でいう学校づくりは、義務教育のことではないのでしょうか。

○ 高儀委員

大学の活用と言いながら、大学生の環境が整っていないと思います。

○ 蛭名委員

江別に住んでいる割合はどのなのでしょう。アルバイトもあまりないから、厚別や新札幌方面に住んで江別に通っているという話も聞きます。

○ 隼田部会長

学校にもよるかもしれませんが、交通や交通費の問題がありますので、地方から来ている学生は江別に住んでいるという人が多いです。

○ 高儀委員

ある程度見えてはきましたが、最終的にどうすれば良いかがなかなか出てきません。核になる人間をどうすれば良いのでしょうか。

○ 隼田部会長

キーマンと、見える化と、集まる場所をどうするかです。こういう具体的なことを実現できるような総合計画とするには、どのように表現したら良いのでしょうか。5本の柱の中に「コンパクトなまちづくり」とあって、駅周辺の賑わいをつくり、そこがハブになって、そこから交通ネットワークをできるだけ充実させていくという話を書いてあります。駅の周辺部分が賑わってきて、その周辺に住む人が集まって来るような形になれば、当然商店なども歩いて買い物に来る人がいれば成り立ちます。商業が成り立って、

賑わいが生まれて、もしかすると雇用も生まれて、その中に先ほど議論したような集まる場所があれば、お年寄りもボランティアなどで来るし、ボランティアとしてではなくてお客さんの形で来ます。子育て世代の人たちは、もし駅周辺に住んでいれば、そのまま来られるし、1戸建てに住みたいという車に頼れる若い世代の人たちは駅から離れた地域に住んで、そこから駅に来て、駅の近くで子どもを預けてそのまま働きに出ることができます。そうすると高儀委員から札幌のベッドタウンとして考えても良いのではないかというご意見がありました。地元雇用場をつくって、地元の商業活動、産業活動を活性化させることも大事ですが、それだけでは成り立ちませんので、そういう人と、札幌に働きに出る人の両方が住むことを考えて、駅周辺のコンパクト化の部分で上手く誘導することができると、相当メリットが大きくなります。今までであれば雪かきが大変で札幌のマンションに引っ越すと言っていたお年寄りたちが、不便だから野幌のマンションに引っ越すというようになるかもしれません。江別には3駅ありますので、その核ごとにそうなるようになっていくかもしれません。その辺りを上手く絵描けないだろうか。私は考えています。

○ 高儀委員

戸建を家具付きで若い世代へ売って、そのお金ですぐ近くのマンションに移り住んだ年配の人もいます。住み慣れた地域に住みたいという人が増えてきて、市内での住み替えをするように変わってきていると思います。今までの友達付き合いも変わっていないし、知っている所に買い物へ行けるので、すごくメリットがあると聞いています。

○ 隼田部会長

今までの周辺の環境がそのまま使えるので、地域内で上手く引っ越しや住み替えができると、引っ越しにかかる色々なストレスはかなり軽減されると思います。先ほど蛭名委員がおっしゃった、駅を中心とした核の外側にいると思っている人たちはどうしたら良いでしょうか。

○ 蛭名委員

顔づくり事業で、駅周辺の賑わいの創出をしていますが、市営駐車場が閉鎖になると聞きました。バスも1時間に2～3本なので車を使いますが、駅周辺に用事が出て出かけても駐車場が少なく不便なので、駅を中心とした円の外側に住んでいる人にとっても便利のように駐車場の整備などをしてほしいと思います。

○ 隼田部会長

車を利用できる人であれば、駅から離れたところに住んでいてもすぐに駅まで来られて、気軽に移動できるから問題ないと思いますが、車を利用していない人にとってはとても不便になっています。

○ 蛭名委員

そこで交通のネットワークということになると思いますが、現実的にはバスの利用は冬場には多いようですが、自転車に乗れる夏場などの時期は少ないようです。

○ 隼田部会長

人口規模などを考えた場合、バス網をものすごく充実させることが実際にできるかどうかというのは大きな問題です。絵に描いた餅になってしまうのは目に見えていて、その中でも少しでも乗り継ぎが上手くいくようなダイヤをつくってもらおうとか、その程度です。そうすると、自分の自由になる足がなくなった場合に、どこに住むかという問題が出てきます。

○ 高儀委員

バスに関しては、路線バス以外にも、たとえば湯の花やたまゆらのバスを利用して、ワンコインで利用できるような仕組みができないかという意見がえべつ未来市民会議がありました。現実的にできるかどうかは交渉次第なのかと思います。

○ 蛭名委員

それが駅や市立病院まで行ってくれると便利ですが、バスの営業の認可の問題もあります。夏場だと路線バスもあんなに大きなバスでなくても良いと思うくらい空いています。

○ 隼田部会長

そういうことを考えると、バス会社の経営上、本数が減ったり、ルートが減ったりということになっていくのは仕方ないと思いますが、そうなってしまうと困ります。たとえば、環境都市として世界的に有名になったブラジルのクリチバという街では、バスネットワークがものすごく発達しています。民間事業者任せながら、行政側が主導権を握ってルートなどを設定するような委託の仕方をしています。ただし、人口規模が札幌市並みですので、それと江別市の現状を比較すると難しいとは思いますが、そう考えると、周辺部に住める人と住めない人が出てくるのは、如何ともしがたい現実なのかもしれません。引っ越しのデメリットよりもメリットが大きくなるような形がとれば、住み替えが促進できるでしょうし、江別市といっても広いので市内でも大きな移動になるかもしれませんが、少なくとも病院や買い物は同じところを使えるでしょうから、他所の街へ行くのと比べるとインパクトが小さいと思います。

○ 湯浅委員

現代の車社会に対応した駅周辺のあり方を考えるべきではないでしょうか。ハード面の整備だけでは難しいので、駅周辺の人が集まる中心地という性質を活かして、世代を超えた集まりの場所として、コミュニティ・カフェのような場を設けるなどして、賑わいの基になっていくと良いと思います。

○ 隼田部会長

ハード面の整備だけだと箱物で終わってしまうし、ハード面の整備だけの計画はのご時勢では立てられません。行政がどんどん箱物をつくれる時代ではないですし、民間が動きやすくなしないと活性化しません。その部分は都市計画などで誘導していくというようなことがあると思いますが、その上に立つのが総合計画ですので、ハード面だけで整備するとかそういう個別の計画の話ではありません。「コンパクト」と言っているのは、機能的なコンパクトのことで、それについてはソフトの部分が実はかなり重要で、

先ほどのキーマンの話であったり、見える化の話などのことです。集まる場所はハードですが、そこで行われる活動というのはソフトの部分なので、そのソフトの部分をかなり意識したコンパクト化のイメージで、えべつ未来市民会議では議論が進んでいました。

○ 隼田部会長

若い世代が新たに江別に移り住んでくることを想定した場合、どういうところに住みたがるのでしょうか。

○ 藤本委員

繁華街とか利便性の高いところに憧れるのではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

我々の世代から下くらいの世代だと、収入も伸び悩んでいたり、減っていたりしていて、これでどうやって結婚して生活していくのだろうかという状況です。そのような状況の中で、利便性の高いところは当然値段も高いわけですし、そうするとどういうところに住むのでしょうか。

○ 蛭名委員

江別には繁華街という点での魅力はないのではないのでしょうか。むしろ自然環境の豊かさなどではないのでしょうか。

○ 隼田部会長

そうでしょうね。江別が若い人にアピールするとしたら自然環境のことや、土地が安く、大きな敷地で家が建てられるとか、札幌への利便性が良いところだと思います。手稲と札幌、野幌と札幌を比較しても、札幌の中心地への利便性では負けていないと思います。そういう利便性がありつつ、野幌であれば駅周辺にある程度集積しています。大麻駅や江別駅周辺については別問題としてありますが、それぞれの特徴を活かしながら同じように集積させることはできるかもしれません。

○ 蛭名委員

野幌駅からバスに乗らなければならないとなると不便になります。

○ 隼田部会長

そうしたときに駐車場が問題だとか、パークアンドライドといった話になります。

○ 蛭名委員

駅まで車で送り迎えする人がとても多いです。それによってバスの利用が少なくなっているのかもしれない。

○ 隼田部会長

自分自身の経験から言っても、バスの本数が少ない中でバスを待っているよりは、すぐに車に乗っていった方が楽です。車中心の社会だとどうしてもそうなってしまいます。

○ 蛭名委員

昔は駅で降りてから、駅前の商店街で買い物をしながら、20～30分の距離であれば歩いて移動していましたが、現在は車で移動するようになってしまっています。

○ 隼田部会長

若い人が江別に入ってくるとしたら、自然の豊かさや土地の安さを重視する人と、駅周辺に集積してコンパクト化が進んで、駅周辺の利便性が高まれば、賑わいのあるところに住みたい人たちも来るようになるかもしれません。

○ 藤本委員

年をとってから江別に戻って来たいという人はたぶん多いかと思いますが、若い時には、単純に繁華街への憧れというものがあります。たとえば本州などに行ったときにどこから来たかを説明するとなると、やはり札幌の隣の江別という言い方をすると思います。やはり、江別について自信を持って言える何かが必要ではないかと思います。それはたとえば都市の大きさであったり、富良野のように自然などであったりするわけですが、江別でずば抜けた何かを探すということが、江別に対する愛着を持つ足がかりになるのではないかと思います。

○ 高儀委員

4万9千人くらいの方が江別市内の駅を中心として往来しています。その駅周辺をコンパクトにして賑わいを創出させて、交通ネットワークを充実させれば、子どもも高齢者も駅周辺に集まることができます。集まる場ができて、見える化が進んでいくためにはイニシアティブをとる人が必要になり、そういったキーマンの育成をしなければならないという話になったと思います。これを総合計画にまとめるのは難しいです。

○ 隼田部会長

この中で、軸は何でしょうか。「子どもを産み育てる環境づくり」が必要というのはその通りであり、「一人ひとりの成長を支える教育と文化」もその通りですが、子どもを産み育てやすい環境でないと子育て世代は参加できないし、高齢者も近所でなければ参加できないとか、無関心層の目を引かなければならないという話が出ました。暮らしやすい高齢者の居住環境をどうやって充実させるのか、ということも考えなければなりません。安心して暮らせるというのは、居住環境の充実や子育てのことなど色々な点が絡んできます。そしてコンパクトなまちづくりという話も出ています。この中で、メインの幹がどれで、そこから広がってくる枝葉はどれでしょうか。もしくは、ここにはまだなくて、全部を束ねて、メインの幹になるものが他にあるのでしょうか。

○ 藤本委員

少なくとも、江別はそれほど住みづらいとは思いません。住みやすさを知らせることも一つの手だと思います。それぞれに不満はあるかもしれませんが、現状を知ることも大事だと思います。

○ 蛭名委員

これから先の10年を考えたときに、現状でも30歳代の子育て世代が流入してきているそうですが、今後ずっと継続的に流入してきてもらえるようにすることで、歯止めをかけることができない高齢化とのバランスが取れるのではないかと思います。

○ 湯浅委員

コンパクトなまちづくりのところにを入れるのが良いのか分かりませんが、子どもから

障がい者や女性も含めて高齢者までの各世代が、交流できて支え合いながら、一人ひとりが持っている経験や知恵や力を活かせるリーダーが必要で、そういった人づくりや交流する場づくりが必要だと思います。子どもや高齢者が交流するということになると色々な部会の戦略と関わってきますが、人づくりという部分では、核になるリーダーが必要であり、場所というのは、既存の空き家や駅の再開発との関連で歩いて通える範囲内で考えて、これからは市民が自分たちでそういう場をつくるために空き家を提供するとか、その中で自分がリーダーをやっていくという人が、今後この考え方を市民にPRしていけば出てくるかもしれません。大麻の銀座商店街にあじさい亭というのがあり、空き店舗を利用して色々な人が集まる事例があります。これまで高齢者対策であるとか障がい者対策として、縦割りでやってきましたが、一つの目的で色々な政策効果が実現するようなものの考え方をもっと色濃く総合計画の中で滲ませることで、個別計画を実施するときにそれらを横でつなぐ役割を総合計画が担えるのではないのでしょうか。

○ 高儀委員

幹として考えるならば、駅を中心とした暮らしやすいまちづくりではないかと思います。これを幹として、後は枝葉になるのではないのでしょうか。「駅を中心とした賑わいのまちづくり」と「暮らしやすいまちづくり」の2つの柱が重なっていると思います。

「暮らしやすいまちづくり」の中にすべて含めて考えるということだと思います。

○ 隼田部会長

ハード的な部分とソフト的な部分を上手く幹にまとめながら整理できるのではないかと考えています。

まだ部会としての意見がまとまりきってはいませんが、こういう意見が出たということで一度整理させていただき、次回の全体会議で報告したいと思います。次にまた部会がありますので、そのときにもう一度詳細を審議したいと思います。

(2) えべつ未来づくりビジョンの内容について

議事(1)で会議終了時間となったことから、次回以降に議論

(3) その他

次回の第4回行政審議会(全体会議)の日程調整のため、各委員の都合確認

■閉会